中国における家庭環境の変容と両親の教育期待の形成

——大連市での質問紙調査に基づいて——

比較教育社会学コース　許　　敏

Changes of Family Environment and the Formation of Parents' Expectation on Child Education
: Research based on Survey of Dalian, China

XU Min

Currently family education in Chinese families is undergoing significant changes. This is partly due to societal changes which in turn leads to changes in family environment. This paper analyzes the impact of changes of family environment on parents' expectation on their children's education as well as the reasons behind the differences of such expectation and impact between cities and rural communities in China.

目　　次

Ⅰ　問題提起
　A．研究目的
　B．分析の視点と課題
　C．データ・調査地点・変数の説明
Ⅱ　分析結果
　A．家庭環境の特徴
　B．学校ランク・学業成績と家庭環境との関連
　C．家庭環境と両親の学歴期待
　D．親の学歴期待の規定要因
　E．親の学歴期待の地域差
Ⅲ　まとめと考察

Ⅰ　問題提起

A．研究目的

現代中国では家庭教育のあり方が急速に変化している。その背景としては次の二つが重要である。一つは，1979年から実施されてきた「一人っ子」政策，もう一つは，「改革・開放」政策による社会環境の急激な変化である。

「一人っ子」政策は世界的な関心を集めてきたが，一人っ子家庭の教育については，過保護，知育偏重，過剰期待，自活生活の不足，大量消費社会への移行に伴う道徳規範の弛緩などが問題点として指摘されている（新保1993)。しかし，これまでの研究はそうした弊害を指摘してはきたが，子どもを取り巻く社会環境・家庭環境の変化との関連を視野に入れて家庭教育のあり方を考察したものはほとんどない。

「改革・開放」政策の実施以降，中国社会は大きな変化を経験してきた。経済構造，階層構造，文化意識，価値観・生活様式，家族構造など，社会生活のあらゆる側面で大きな変動が起こっている。日本でも，こうした現代中国の社会変動に注目し，人口変動，家族変化，社会移動，教育制度などの変化とその特徴を考察した研究がかなり行われている（例えば，宇野　1993，青井1995，若林　1996)。しかし，管見した限りでは，そうした変化が進むなかで家庭教育のあり方がどうなっているかを考察したものはない。

最近の中国の調査研究が示しているように，こんにち中国では，子どもの教育に対する両親の期待は非常に高くなっている（郭・劉　1997，袁・范　1998)。筆者自身の調査でも同様の結果が確認された。表1にも示されているように，両親の子どもの教育に対する期待は非常

表1　地域別の親の期待学歴（%）

	高校まで	大専	普通大学	名門大学	T
農村	28.6	14.4	17.0	39.8	100(206)
都市	8.6	8.4	10.9	72.1	100(394)
T	15.5	10.5	13.0	61.0	100(600)

に高く，都市部では7割強が名門大学進学を期待しており，農村部でも7割強が大学専科以上を期待している。現在の中国における大学進学率は約4％でしかないことを考えるなら，この数字がいかに大きいかということがわかる。

中国は社会主義国として平等主義を標榜してきたが，実際には，都市と農村，高学歴者と低学歴者，ホワイトカラーとブルーカラーとの間には非常に大きな格差がある。たとえば高等教育機会は圧倒的に，都市出身者や，高学歴・ホワイトカラーといった上位階層の子弟によって占められている（李　洵　1995）。高等教育進学率は約4％，高校進学率も約20％にすぎないという状況のなかで，こうした教育機会の格差は高等教育段階だけでなく，高校段階，さらには小・中学校段階から始まっていると考えられる。

そこで本研究では，家庭教育のあり方の一つの重要な側面として，子どもの教育に対する親の教育期待について考察する。それは，一方で教育機会格差の一つの背景となっており，もう一方で，家庭教育の重要な一側面でもあると考えられるからである。小学校段階から親の教育期待が分化しているとしたら，その異なる教育期待は家庭教育全般に反映していると考えられるからである。

B．分析の視点と課題

進路選択過程の始点は社会的出自，とくに親の階層的地位にある。例えば藤田（1979）は日本の社会的地位達成過程を分析し，親の階層的地位は「大なり小なり子の進路選択を規定する傾向がある」と指摘している。多数の研究が社会的地位達成・進路選択の機会の不平等を明らかにしてきたが，それらの研究で用いられてきた仮説やモデルを藤田は，「葛藤理論」「地位達成過程モデル」「トラッキング・モデル」の三つに分類し，次のようにまとめている（潮木・藤田ほか　1980）。

「葛藤理論は，階層間格差の原因を学校文化の階級性に求める傾向がある。他方，地位達成過程モデルでは，知的能力やアスピレーションといった個人的・業績的特徴を媒介要因としてモデルに導入し，階層間格差をこれらの要因によって説明しようとする傾向がある。さらに，トラッキング・モデルでは，出身階層要因を含めて進路選択過程において重要と考えられる諸要因相互間の連鎖構造を明らかにしようとする傾向がある。」

このまとめからも示唆されるように，個々人の進路選択の機会を左右する要因としては，家庭環境要因と学校環境要因が重要だと言える。そこで本研究では，この二つの要因に注目して，親の教育期待の階層差について考察することを課題とする。

その際，家庭の階層的地位を親の職業と家庭収入によって捉えることにする。1970年代までの中国社会は，「戸籍制度」に基づいて分化しており，幹部・労働者・農民という一種の準身分制が一般化していた（李 1992）。また，この「戸籍制度」に基づいて，とくに都市と農村の間には，就職機会，収入，教育，社会保障などの諸側面で大きな格差があった。ところが，「改革・開放」政策以降，自営業の容認・増大，外国資本の導入，農村における「生産責任制」の導入，郷鎮企業の設立などが急速に進んできた。

こうした社会制度と産業構造の変化に伴って社会分化のありようも変化してきたが，もう一方で，「戸籍制度」「幹部制度」の影響も都市と農村の格差も根強く存続してきた。その結果，社会分化の実態は，収入を中心にした経済的地位の変化に留まり，権力や社会的威信といった社会的地位に関しては必ずしも大きな変化が起こったとは言えない。つまり，現代中国の社会構造は，基本的には，社会的地位と経済的地位が非一貫的な二元的構造になっていると言える。

社会主義国としての諸制度がこの構造をさらに複雑なものにしている。たとえば郭（1993）は，その特徴として，①階層分化の不完全性，②公有制内部の階層分化の偏在性，③社会分化の地域的不均等性，④社会分化の都市・農村間の異質性，⑤社会分化過程における制度的制約性を指摘している。

こうした現代中国の社会構造の諸特徴を念頭に置いて本研究では，第一に，家庭環境諸要因間の相互関係について考察し，第二に，それらの家庭環境諸要因が子どもの教育に対する親の期待をどのように規定しているかについて考察する。その際，特に都市と農村との違いについても検討する。

C．データ・調査地点・変数の説明

本研究で用いるデータは，筆者が1996年4月から5月にかけて，沿海対外開放都市の一つである大連市とその近郊の農村地域S鎮で行った質問紙調査によって得られたものである。調査は，合計6つの小学校の5，6年生（S鎮では親の読み書き能力を考慮して一部，中学校1年生を含む）及びその親を対象に行われた。小学生・親のペアでの有効サンプル数は600である。

大連市は遼東半島の南端，黄海と渤海の境界の基点に位置する都市である。その地理的特徴の故に，大連市は中国東北地方の海陸交通の中枢，対外貿易の玄関口として発展し，また，韓国・日本などの東亜諸国からの対中

投資の中心地域ともなり，現在の中国でもっとも注目される港湾・工業・観光都市の一つとなっている。

対象農村地域としてのＳ鎮は，大連市内から南に車で約１時間の位置にある。1970年代までは，野菜栽培・牧畜などを中心とする農業郷であったが，80年代以降，郷鎮企業が急速に発展し，現在では，郷政府所在地は，工業区，居住区，公共建築区，商業貿易区などに区分され，都市化が急速に進んでいる。

以下の分析で用いる変数は次の通りである。

両親の期待学歴：高校までを１，大学専科を２，普通大学を３，名門大学を４とするカテゴリー　順序変数

親の職業：父親・母親とも，農民を１，普通労働者を２，準専門職（高校までの教師，事務職，警察官など）を３，専門職（大学教師，弁護士，研究者，管理職など）を４とするカテゴリー　順序変数

家庭収入：年収5000元以下を１，5000～15000元を２，15000元以上を３とする順序変数

蔵書量：「有名人伝記」「中国古典小説」「外国古典小説」「通俗小説」「科学技術関連の本」「実用的な本」をどれくらい持っているかについて，「持っていない」から「10冊以上」までの４段階評定法で回答してもらった結果を合成した変量

子どもの学業成績：自己評価で，「よくない」を１，「普通」を２，「よい」を３とするカテゴリー　順序変数

学校ランク：社会的評価に基づき，農村地域の学校を１（ランクＡ，以下同様），都市部の普通小学校を２（B），有名小学校を３（C）とする順序　カテゴリー変数

Ⅱ　分析結果

Ａ．家庭環境の特徴

中国社会では長らく，都市と農村との間には，「戸籍制度」を基盤にした制度的障壁があり，そのため生活機会・教育機会の大きな格差が存続してきた。しかし，1980年前後から，農村社会は急速な変貌を遂げてきた。人民公社の解体が進められ，政治と経済の分離が図られたからである。生産請負制（家庭聯産承包責任制）が導入され，それまで人民公社の「大鍋飯」制の下で抑制されてきた農民の労働意欲が解放され，農業生産力が飛躍的に増大した。また，農業過剰人口問題を解決するために郷鎮企業振興策が採用され，過剰人口の吸収が進んだ。

こうした変化－農業生産請負制の実施とそれに伴う市場経済化の進行，及び，郷鎮企業の発展とそれに伴う農村地域の工業化の進展－によって，中国の農村社会は急激に変化し，それまでの均質な農民層が分解・分化してきた。たとえば陸（1997）は，農村社会はこんにち，農業労働者，農民工（郷鎮企業，国営企業），雇用者（私営企業），農民知識人，私営業者，私営企業主，郷鎮企業管理者，農村行政管理者という８つの階層に分化していると指摘している。

Ｓ鎮の社会発展資料（1990－95年）によれば，Ｓ鎮の総収入は1990年の２億1300万元から95年の15億6315万元へと，この５年間で約７倍に急増した。郷鎮企業の生産高は鎮の総収入のなかで大きなウェートを占めており，鎮経済の基幹となっている。この急速な経済発展に伴って住民の所得水準も大幅に上昇し，一人当たりの年収は90年の1620元から95年の3598元へと倍増した。つまり，郷鎮企業が急成長し，就業構造も変化し，家庭収入も急上昇しているということである。

今回の調査データで見ると，親の就業状況では，農業に従事しているのは父親で18.9%，母親で24.8%でしかなく，残りの約８割は農業以外の仕事に従事している。また，家庭所得でも，低所得層は約１割でしかなく，６割以上が中所得層，高所得層も３割近くになっている。

こうした経済社会の変化が進むなかで，家庭環境諸要因がどのような相関関係にあるかを農村と都市に分けて見てみよう。まず農村地域について見てみよう（表２.a）。

第一に，父学歴と母学歴の間に高い相関が見られる。父職業と母職業との相関もかなり高い。この結果は，結婚が学歴階層や職業階層によって多少なりとも左右される傾向があることを示している。第二に，父・母とも学歴と職業との間に.２～.３の統計的に有意な相関がある。この結果は，職業達成が学歴によって規定される傾向（学歴主義的傾向）があることを示している。第三に，家庭収入は父職業と１%水準で有意な相関があるが，母職業や学歴との相関は統計的には微妙である。これは，経済構造が急激に変化しているなかで地位の非一貫性が顕著になっていることと，職業変数の設定が大まかすぎることによると考えられる。第四に，家庭の蔵書量は，母学歴との相関がかろうじて10%水準で有意であ

表２.a　農村における家庭環境諸要因間の相関

	父学歴	母学歴	父職業	母職業	家庭収入	蔵書量
父学歴	1.000					
母学歴	0.510	1.000				
父職業	0.291	0.237	1.000			
母職業	0.187	0.265	0.362	1.000		
家庭収入	0.083	0.144	0.226	0.149	1.000	
蔵書量	0.042	0.133	0.096	0.039	0.053	1.000

るが，総じて他の家庭環境要因との間に有意な相関はない。これは，都市の場合と比べると明らかなように，農村では総じて蔵書量自体が少ないからだと考えられる。

以上の結果をまとめると，大連市近郊のＳ鎮では，郷鎮企業が急成長し，工業化が進み，農民層の分解・分化が進んできた。この農民層の分化は，職業構造の変化として表れているだけでなく，家庭収入の格差としても表れている。しかし，職業と収入との相関はそれほど高くない。また，家庭の文化的環境（蔵書量）は，今のところ必ずしも職業・所得階層の変化に連動していない。

次に都市部について検討しよう。中国社会の変革は農村部から始まり，都市部に広がってきた。しかし，都市部の変革は農村部に比べて難航している。確かに1970年代後半以降，都市部でも自営業経営が認められ，外資系の企業が増えてきたが，未だそれは一部に限られており，社会の基幹は依然として国営企業にあり，しかも，その変革は必ずしも順調に進んではいない。とはいえ，都市部の特徴として，農村部より高学歴者が多く，ホワイトカラーや専門職従事者の割合も高い。

表２.ｂは，表２.ａと同様に，大連市の場合について，家庭環境諸要因間の相関を示したものである。第一に，父学歴と母学歴，父職業と母職業の相関はかなり大きく，しかも，その値はＳ鎮の場合よりも大きい。第二に，父・母とも，学歴と職業との相関もかなり大きく，しかも，Ｓ鎮の場合よりも大きい。つまり，結婚の階層規定性も学歴主義的傾向も，都市部のほうが強いということである。第三に，家庭収入と学歴・職業との相関は，農村部より高く，いずれも統計的に有意だとはいえ，それほど大きいものではない。この非一貫性は，農村部の場合と同様の理由によるものと考えられる。第四に，蔵書量と他の家庭環境諸要因との相関は，農村部の場合とは違って，いずれも統計的に有意であり，しかも，特に父学歴・母学歴との相関は.３前後とかなり高い。この結果は，都市化・高学歴化・専門職化が進むと家庭の文化的要因と家庭の社会経済的諸要因との相関が高まる傾向があるということを示唆している。

表２.ｂ　都市部における家庭環境諸要因間の相関

	父学歴	母学歴	父職業	母職業	家庭収入	蔵書量
父学歴	1.000					
母学歴	0.615	1.000				
父職業	0.450	0.408	1.000			
母職業	0.312	0.496	0.452	1.000		
家庭収入	0.164	0.167	0.215	0.228	1.000	
蔵書量	0.317	0.292	0.155	0.151	0.238	1.000

そこで，都市と農村との格差が家庭環境諸要因のどの側面で特に強いかを見てみよう。表２.ｃに示されているように，家庭収入以外の諸指標と地域との相関はかなり大きい。特に職業と学歴の地域間格差は大きく，蔵書量についても統計的に有意な差がある。しかし，家庭収入については，ほとんど差はないようである。

Ｂ．学校ランク・学業成績と家庭環境との関連

中国の小学校はほとんどが公立で，戸籍所在地の属する学校に通う小学区制が原則となっている。しかし，一部に重点小学校があり，また，学校間で設置者（学区）の違いによるかなりの格差が存在している。さらに，学区間で居住者層がかなり異なっている。そこでまず，こうした状況が学校ランクと生徒の家庭環境との関係にどのように反映しているかを見てみよう。

表２.ｃに示されているように，学校ランクと親の学歴・職業との相関は.４～.５と大きく，蔵書量との相関も.３に近く，かなり大きいと言える。しかし，家庭収入との相関は非常に小さい。つまり，学校ランクが高いほど，親の学歴・職業的地位が高く，家庭の蔵書量も多いということである。

次に学業成績と家庭環境との関連を簡単に確認しておこう。ここで用いる学業成績は，クラス内ないし学年内での成績を三段階で生徒に自己評価してもらったものである。したがって，表２.ｃに示されているように，学校ランクとの相関が小さいのは当然である。

さて，家庭環境諸要因との相関を見ると，蔵書量との相関が比較的大きい。また，母職業及び両親の学歴との相関も統計的に有意である。しかし，父職業及び家庭収入との相関は統計的に有意でない。この結果は，日本の先行研究の結果と類似している（藤田　1978）。すなわち，学業成績は父職業や家庭収入などの要因よりも，親の学歴や蔵書量など家庭の文化的環境要因によって左右される傾向が強い。（なお，紙幅の都合でクロス表は省略するが，.１程度の相関値でも，10%前後の差が認められる。）

Ｃ．家庭環境と両親の学歴期待

スィーウェルら（Sewell et al. 1969）の研究以来，アメリカや日本における先行研究は，「重要な他者（significant others）」の態度や期待が家庭環境の影響を媒介する要因として子どもの学業成績や進路選択・社会的地位達成に影響していることを明らかにしてきた（藤田　1978参照）。前項でも確認したように，学校ランクや学業成績は家庭の社会的・文化的環境と統計的に

表2.c　家庭環境・学歴期待に関わる諸要因間の相関

	地域	学校ランク	父学歴	母学歴	父職業	母職業	家庭収入	蔵書量	学業成績	親の学歴期待
地域	1.000									
学校ランク	0.872	1.000								
父学歴	0.382	0.476	1.000							
母学歴	0.333	0.447	0.645	1.000						
父職業	0.341	0.425	0.483	0.434	1.000					
母職業	0.444	0.504	0.401	0.515	0.508	1.000				
家庭収入	0.005	0.067	0.131	0.151	0.207	0.183	1.000			
蔵書量	0.213	0.284	0.291	0.292	0.195	0.191	0.165	1.000		
学業成績	0.112	0.069	0.101	0.076	0.049	0.110	0.023	0.167	1.000	
親の学歴期待	0.332	0.377	0.286	0.279	0.236	0.277	0.121	0.296	0.249	1.000

有意な関連がある。親の学歴期待（子どもの学歴達成に対する期待）は，そうした「重要な他者」の態度や期待の一つとして，この両者の関係を媒介し，もう一方で，子どもの学業成績や通っている学校のランクによって形成され，その後の進路選択に影響を及ぼすと考えられる。そこで以下では，この親の学歴期待の規定要因について検討する。

まず，これまでに検討した諸要因と親の学歴期待との関連の有無を確認しておこう。表2.cに示されているように，家庭収入との相関が比較的小さいものの，どの

図1.a　父学歴×親の期待学歴

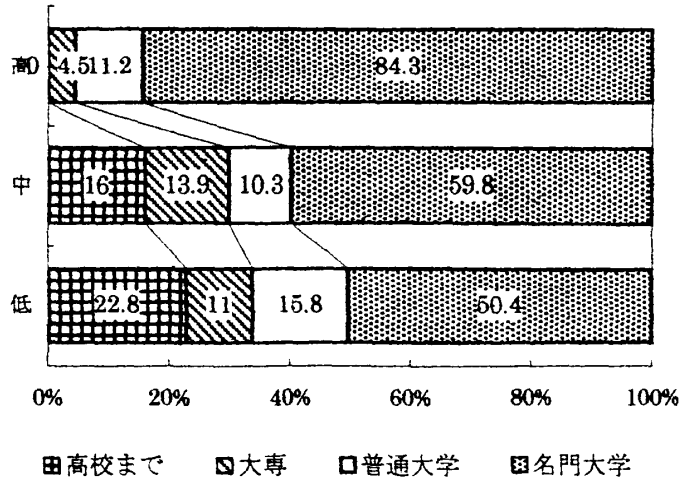


図1.b　父職業×親の期待学歴

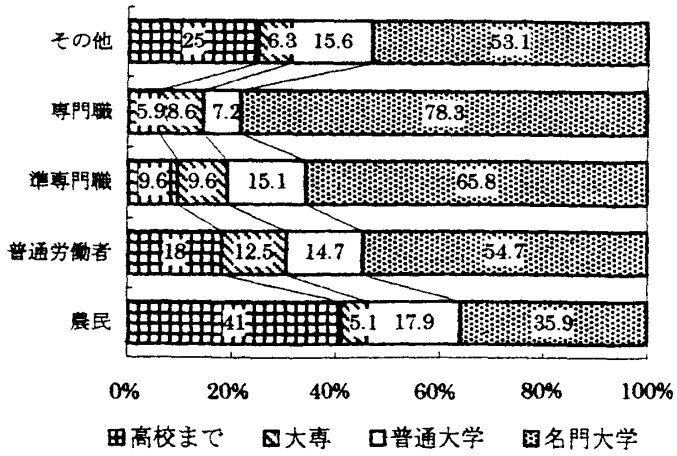


図1.c　家庭収入×親の期待学歴

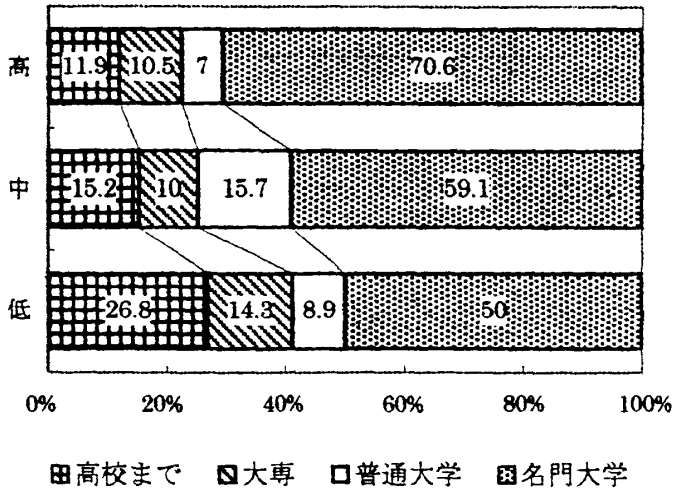
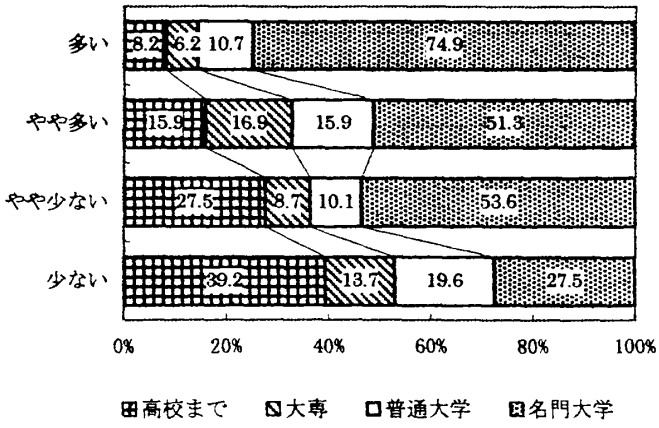


図1.d　蔵書量×親の期待学歴



要因との間にも統計的に有意な相関がある。特に学校ランク及び地域との相関が大きく，次いで蔵書量や両親の学歴や母職業との相関もかなり大きい。そこで，こうした関連をクロス表でもう少し具体的に見てみよう。図1には，父学歴，父職業，家庭収入，蔵書量について示したが，母の学歴と職業についても結果はほぼ同様である。

図1より明らかなように，親の期待学歴は，親の学歴が高いほど，親の職業的地位が高いほど，家庭収入が多いほど，さらには，蔵書量が多いほど，高くなっている。特に，父学歴「高」，父職業「専門職」，蔵書量「多い」では，75%～85%が名門大学に子どもを進学させたいと思っている。つまり，高学歴の親，職業的地位の高い親，蔵書量が多く知的関心の高い親ほど，子どもの教育・学歴達成に高い期待を寄せ，子どもの教育環境を整える傾向があるということである。

ところで，一般に人びとの意識や関心は現在の状況によっても左右される傾向がある。この傾向は，教育達成・地位達成の研究では，トラッキングの社会化機能・アスピレーション形成機能として指摘されてきた（藤田1978&1979）。その機能は，子ども自身のアスピレーションだけでなく，親の期待についても当てはまると考えられる。図2は，この点を確認するために，学校ランク及び学業成績によって親の学歴期待がどのように異なるかを示したものである。図2.aに示されているように，学校ランクが高いほど親の学歴期待も高い。学校ランクCでは「有名大学」を期待する親が8割強に達しているのに対して，学校ランクAでは，その割合は半分以下の4割でしかない。子どもの学業成績による期待度の違いも同様である。成績が「よい」の場合，「有名大学」を期待する親は77%であるのに対して，「よくない」ではその割合は46%でしかない。

図2.a　学校ランク×親の期待学歴

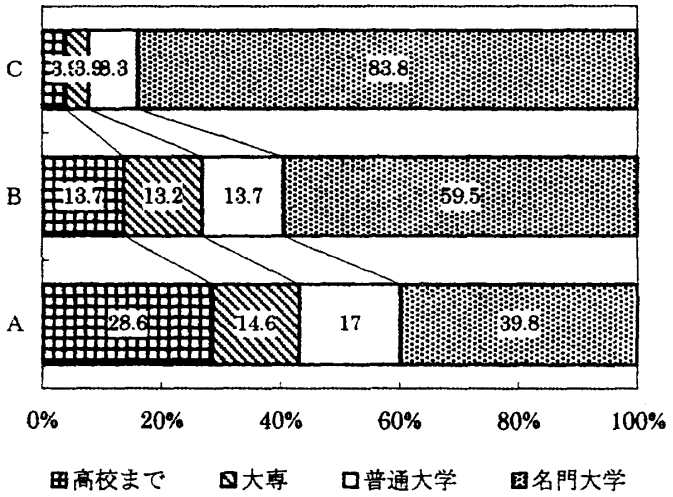
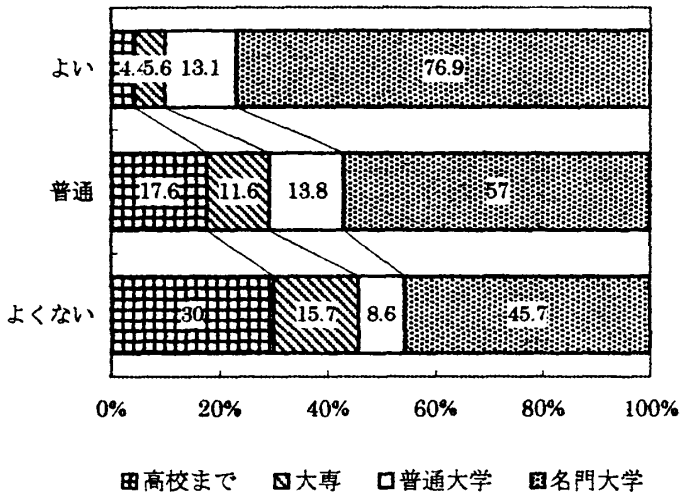


図2.b　子どもの学業成績×親の期待学歴



D．親の学歴期待の規定要因

前項では，単純相関係数と二重クロス表に基づいて，親の学歴期待は親自身の学歴や職業的地位や文化的関心（蔵書量）などによって明らかに異なること，また，子どもの通う学校ランクや子どもの学業成績によっても大きな違いがあることを確認した。そこで次に，親の学歴期待を左右する要因として，それらの諸要因のどれが特に重要かを，三重クロス表と多重回帰分析によって考察しよう。

表3.aは，学校ランク別・父学歴別に親の学歴期待を示したものである。紙幅の都合と説明の煩雑化を避けるために，「有名大学」の部分を中心に見ていく。第一に，前項でも確認したように，父学歴が高いほど，また，学校ランクが高いほど，「名門大学」期待率も高い。しかし第二に，父学歴別の差は学校ランクA（低ランク）では非常に大きいが，学校ランクが高いほどその差は小さくなり，ランクC（高ランク）では，その差は約10%ポイントでしかない。同様に，学校ランク別の差も，父学歴が低い場合は非常に大きいが，父学歴が高いほどその差は小さくなる。つまり，父学歴と学校ランクのどちらかが高ければ，子どもに対する学歴期待も高いということである。逆に，父学歴が低い場合には，学校ランクの影響が大きく，学校ランクが低い場合には，父学歴の影響が大きいということである。第三に，学校ランクAにおける学歴期待の父学歴による最大差（71.4%－36.0%＝35.4%）と父学歴「低」における学歴期待の学校ランクによる最大差（76.1%－36.0%＝40.1%）を比べると，後者の方が大きい。同様に，学校ランクCにおけるそれ（最大差　10.9%）と父学歴「高」におけるそれ（最大差　15.6%）を比べると，後者の方が大き

表3.a 学校ランク×父学歴×親の期待学歴（%）

学校ランク	父学歴	高校まで	大専	普通大学	名門大学	T(実数)
A	低	32.4	13.7	18.0	36.0	139
	中	23.3	15.0	16.7	45.0	60
	高	0.0	28.6	0.0	71.4	7
B	低	13.8	11.5	14.9	59.8	87
	中	18.4	17.1	11.8	52.6	76
	高	0.0	7.4	14.8	77.8	27
C	低	10.9	2.2	10.9	76.1	46
	中	5.2	8.6	1.7	84.5	58
	高	0.0	2.0	11.0	87.0	100

表3.b 学校ランク×父職業×親の期待学歴（%）

	父職業	高校まで	大専	普通大学	名門大学	T(実数)
A	農民	41.0	5.1	17.9	35.9	39
	普通労働者	26.8	17.9	17.9	37.4	123
	準専門職	20.0	10.0	20.0	50.0	20
	専門職	22.7	18.2	9.1	50.0	22
B	普通労働者	15.3	12.2	16.0	56.5	131
	準専門職	9.5	19.0	19.0	52.4	21
	専門職	8.1	13.5	2.7	75.7	37
C	普通労働者	8.2	4.1	6.8	80.8	73
	準専門職	3.1	3.1	9.4	84.4	32
	専門職	1.1	4.3	8.6	86.0	93

表3.c 学校ランク×蔵書量×親の期待学歴（%）

	蔵書量	高校まで	大専	普通大学	名門大学	T(実数)
A	少ない	46.4	10.7	14.3	28.6	28
	やや少ない	40.7	3.7	11.1	44.4	27
	やや多い	24.1	22.9	21.7	31.3	83
	多い	22.1	10.3	14.7	52.9	68
B	少ない	35.0	15.0	30.0	20.0	20
	やや少ない	25.0	10.7	10.7	53.6	28
	やや多い	12.5	19.6	12.5	55.4	56
	多い	5.8	9.3	11.6	73.3	86
C	少ない	0.0	33.3	0.0	66.7	3
	やや少ない	7.1	14.3	7.1	71.4	14
	やや多い	6.0	4.0	10.0	80.0	50
	多い	2.9	2.2	8.0	86.9	137

表4　学校ランク×学業成績×親の期待学歴（%）

	学業成績	高校まで	大専	普通大学	名門大学	T(実数)
A	よくない	53.6	17.9	3.6	25.0	28
	普通	28.8	14.4	20.1	36.7	139
	よい	10.3	12.8	15.4	61.5	39
B	よくない	22.2	16.7	5.6	55.6	18
	普通	18.7	16.8	13.1	51.4	107
	よい	3.1	6.2	16.9	73.8	65
C	よくない	8.3	12.5	16.7	62.5	24
	普通	4.0	4.0	7.3	84.7	124
	よい	1.8	0.0	7.1	91.1	56

表5　親の期待学歴に関する重回帰分析の結果

	偏回帰係数	標準誤差	標準化偏回帰係数	
父学歴	0.065	0.061	0.052	
母学歴	0.091	0.066	0.067	
蔵書量	0.159	0.040	0.154	***
学業成績	0.319	0.060	0.195	***
学校ランク	0.314	0.050	0.264	***
(Constant)	1.355	0.162		

注：R^2=.228,「＊＊＊」は P<.001

い。ランクCと父学歴「中」でも同様である。これらの結果は，親の学歴期待の規定要因としては，父学歴よりも学校ランクの規定度の方が大きいということを示唆している。

なお，冒頭の表1でも確認したように，都市と農村では親の学歴期待に歴然とした差がある。また，変数の説明でも述べたように，学校ランクAは農村（S鎮）の学校であるのに対して，BとCは都市（大連市）の学校である。したがって，学校ランク差（特にランクAとB，Cとの差）と地域差はかなりの部分重なり合っていると言える。本来なら，この重なりを考慮して検討すべきであるが，ここでは説明を簡略化するために，学校ランク差として叙述し，地域差については次項で検討する。

さて，学校ランク別・父学歴別の場合とほぼ同様の傾向が，学校ランク別・父職業別の場合（表3.b）にも，学校ランク別・蔵書量別の場合（表3.c）にも見られる。とはいえ，若干異なる点もある。学校ランク別・職業別の場合，職業別の差は学校ランク別の差より明らかに小さい。つまり，親の学歴期待の規定要因としては，父職別より学校ランク別の方が明らかに大きいということである。また，父職業別の差がもっとも大きいのは学校ランクBである。同様に，学校ランク別・蔵書量別でも，蔵書量による差は学校ランクBで際立って大きい。つまり，学校ランクBでは，親の学歴期待は他の諸要因に左右される傾向が強いということである。

他方，学校ランク別・学業成績別の場合は，以上三つの場合とはやや異なる傾向が見られる。すなわち，学校ランク別の差と父学歴別の差はほぼ同じような水準にあり，学校ランクCでも父学歴別の差はかなり大きい。また，父学歴別の差は，学校ランクBよりも，AとCの方が大きい。これは，「名門大学」入学は競争が激しく，成績が良くなければ入学できないからだと考えられる。

以上，親の学歴期待とその形成に寄与していると考えられる諸要因との関連を見てきた。いずれも規定要因としてそれなりに寄与しているようだが，その相対的な重要性はどうなっているかを次に検討する。表5は，これまでに検討した諸要因のうち親の学歴期待との相関が比較的高い五つの要因を説明変数として，重回帰分析を行った結果である。

表5より明らかなように，1%水準で有意な結果が得られたのは，標準偏回帰係数の値の大きい順に，学校ランク，学業成績，蔵書量の三つである。この結果は，これまでの結果と合わせて考えると，親の学歴期待を規定する要因という点で，親の学歴と学校ランクは重なる部分が多いということを示している。つまり，学歴の高い親は子どもをランクの高い学校に通わせ，高い学歴期待を寄せているということである。

蔵書量は，学歴期待の規定要因としては，親の学歴と重なり合う部分もあるが，独自の規定力もある。つまり，学歴に関わりなく，知的関心が強く，蔵書量が多く，子どもに高い学歴期待を寄せる親が少なからずいるということである。同様のことは，学業成績についても言える。自分の学歴や学校ランクに関わりなく，子どもの成績が良ければ，親は子どもに高い学歴期待を寄せる傾向があるということである。

E．親の学歴期待の地域差

表1でも確認したように，親の学歴期待には都市と農村で大きな差がある。前項では，その差と学校ランクとの差を区別せずに，学校ランクの差として検討した。そこで最後に，その地域差について検討しておこう。

表3と表4に示されていたように，農村（学校ランクA）では，父学歴（表3.a）と学業成績（表4）によって学歴期待にかなり大きな差がある。しかし，父職業（表

3.b）と蔵書量（表3.c）による差は，それほど大きいものではない。つまり農村では，親自身の学歴や文化的関心（蔵書量）が高いほど，子どもの学歴取得に対する期待は高くなる傾向があるということである。

他方，都市（学校ランクBとC）では，総じて，学校ランクCよりもBで，家庭環境諸要因や学業成績による差が大きい。特に蔵書量と学業成績による差は顕著である。つまり，学校ランクCよりもBの方が，生徒の家庭環境や学業成績によって親の学歴期待が規定される傾向が強いということである。とはいえ，学校ランクCでも，蔵書量と学業成績による差はかなり顕著である。これらの結果は，蔵書量（文化的関心）や学業成績（子どもの能力）が親の学歴期待の形成に独自の影響を及ぼしているということを示している。

都市と農村の学歴期待の差がいかに大きいかということは，角度を変えてみても確認される。父職業別の差を見ると（表3.b），農村（学校ランクA）では，専門職でも「名門大学」期待は50%でしかないが，都市では，学校ランクBの普通労働者でも56.5%，学校ランクCの普通労働者では80.8%にもなっている。

このように，都市と農村の学歴期待の差は歴然として存在するが，学校ランクの差はすべて都市と農村との差だということではない。そのことは，学校ランクBとCの違いに表れている。どちらも都市の学校だが，たとえば学校ランクBの専門職の「名門大学」期待は75.7%であるのに対して，ランクCの普通労働者でもそれより多くて，80.8%になっている。ランクCとランクBとの間で，こうした最低位カテゴリーと最高位カテゴリーとの逆転現象が見られるのは父職業の場合だけだが，父学歴，蔵書量，学業成績でも，基本的には同様の傾向が見られる。つまり，学校ランクは親の学歴期待の規定要因として地域差に解消されない独自の影響を持っているということである。

Ⅲ　まとめと考察

以上，1980年代以降の中国社会の変化を踏まえ，大連市とその近郊農村地域S鎮で行った質問紙調査に基づいて，親が子どもの教育に対してどのような期待（親の学歴期待）を寄せているか，その規定要因はどのようなものかを検討してきた。最後に，その要点を整理し，若干の考察をしよう。

1）まず経済社会の変化と家庭環境の特徴について確認しよう。中国社会は「改革・開放」政策によって，1980年代以降，急激な変化を経験してきた。従来の「戸籍制度」と人民公社を基盤にした経済社会体制が崩れ，市場経済化と産業構造・職業構造の変化が進み，それに伴って階層構造も急激に変化している。その変化は，都市でも起こってはいるが，特に農村で顕著である。

農村では，農業就業人口が急速に減少し，自営業を始めたり，郷鎮企業に就職する人が急増している。これらの業種では，所得が大幅に増加している。また，農業に留まっている人も，生産請負制の導入により，生産意欲と生産量が高まり，所得も急速に増加している。都市でも，農村ほど構造変化は急激ではないし，所得の増加率も高くはないが，それでも外資系企業や自営業が増加し，所得水準も急速に上昇している。さらに，都市でも農村でも所得格差も急速に拡大している（朱　1998）。

このように経済発展と市場経済化が進むなかで，都市でも農村でも，産業・職業構造の変化と所得格差の拡大が進んでいる。そして，それに伴って階層構造も急激に変化しており，その結果，いわゆる「社会的地位の非一貫性」（原・今田　1978），特に経済的地位と学歴・職業との非一貫性が目立つようになっている。

この点について今回の調査結果では，次の諸点が確認された。第一に，学歴と職業との相関はかなり大きいが，特に都市においてその傾向が顕著である。第二に，それに比べて，学歴・職業と家庭収入との相関は統計的には有意だが，それほど大きくはない。この非一貫性は特に農村で顕著である。第三に，家庭の文化資本（蔵書量）と学歴・職業・家庭収入といった学歴資本や家庭の社会経済資本との相関は，都市部では.2前後だが，農村ではそれよりさらに小さい。この結果は，文化資本の独自性を示唆すると同時に，都市化や高学歴化が進むにつれて，家庭の諸資本間の相関が高まる傾向があるということを示唆している。

2）次に親の学歴期待の規定要因について確認しよう。親の学歴期待は，親自身の学歴・職業，親の文化的関心（文化資本（蔵書量），子どもの学業成績，子どもが通う学校のランク，地域といった諸要因によって左右される傾向がある。このうち，地域による差は歴然としており，農村では学歴期待水準が総じてかなり低いのに対して，都市では，さまざまの要因に規定されて非常に高い。しかし，その他の諸要因が学歴期待に影響を及ぼしているメカニズムは単純ではない。

親の学歴・職業は，農村では学歴期待をある程度は直接規定する傾向があるが，都市では，その影響は直接的というより，むしろ間接的である。すなわち文化的関心や子どもの成績や学校ランクによって媒介される傾向が

ある。また，都市でも農村でも，親の文化的関心や子どもの成績は，親自身の学歴や職業に関わりなく，学歴期待を左右する傾向がある。さらに，都市では学校ランクの独自の影響も認められる。

こうした傾向は，これまで教育社会学研究や進路選択・社会的地位達成過程の研究が展開・確認してきた議論や知見と整合的である。たとえばブルデューらの文化的再生産論（Burdieu　1979）やトラッキングの社会化機能（藤田　1978）やマイヤーのチャーター理論（Meyer 1970）などが，それである。それらは，本稿で検討したような親の学歴期待を説明しようとしたものではないが，そのメカニズムの説明図式は親の学歴期待にも適用可能なものである。

ブルデューらの文化的再生産論は基本的には，親の学歴や経済社会的地位は，その文化資本に媒介されて，子どもの学歴達成・地位達成に影響を及ぼすというものだが，この説明図式は本研究で扱った親の学歴期待の形成にも当てはまる。すなわち，親学歴は蔵書量と学歴期待の両方を左右する傾向があるが，親学歴と蔵書量の両方を考慮すると，親学歴の学歴期待規定力は小さくなり，蔵書量の規定力は残るからである。そして，この傾向は特に都市で顕著である。

トラッキングの社会化機能は，人は進路選択・地位達成過程における自分の構造上の位置が持つ可能性空間のなかで自分の進路展望や地位アスピレーションを形成する傾向があるというものであり，チャーター理論は，学生・生徒は学校の人間形成機能について社会的に広く認められている定義（思い込み）に影響されて自己形成を行う傾向があるというものだが（以上，藤田の解説による），どちらの説明図式も，本稿で検討した親の学歴期待の形成にも当てはまる。すなわち，社会的評価の高い小学校（学校ランクC）に子どもが通っている親は，子どもが重点中学校，重点高校に進学し，さらには有名大学に入学することを期待する傾向があるということである。同様のメカニズムは，子どもの学業成績の場合にも作動していると言える。

以上のような結果を踏まえるとき，経済社会構造・階層構造が急激に変化しているなかで，中国社会は今後，日本や欧米諸国と同様，学歴社会の傾向を強めていくと考えられる。

本稿では，家庭教育の一つの側面として，親の学歴期待を中心に考察した。それは，教育に対する関心が高まるなかで，家庭における日常的なしつけや教育のありように反映していると考えたからである。しかし，言うまでもなく，日常的なしつけや教育がすべて学歴期待によって左右されているということではない。家庭教育の実態に関するより広範な検討は，今後の課題としたい。

（指導教官　　藤田英典教授）

参考文献

青井和夫編　1995　『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会

秋永雄一　1992　「階層と文化」柴野昌山ほか編『教育社会学』有斐閣ブックス

今田高俊・原純輔　1979　「社会的地位の一貫性と非一貫性」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会

潮木守一・佐藤智美　1979　「社会階層と学業成績に関する実証的研究（その１）」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』26巻

宇野重昭編　1993　『静かな社会変動』岩波講座『現代中国』第３巻　岩波書店

苅谷剛彦・苑復傑・黄梅英・李洵　1995　「変貌する中国社会と二つの高等教育：普通大学と広播電視大学の在校生，卒業生の調査の分析」『東京大学教育学研究科紀要』35巻

佐藤智美　1980　「社会階層と学業成績に関する実証的研究（その２）」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』27巻

新保敦子　1993　「中国における一人っ子政策と家族の家庭的機能の変容」『早稲田大学教育学部学術研究』第41号

Sewell, W.H., Haller, A.O. & Portes, A.　1969　"The Educational and Early Occupational Attainment Process" American Sociological Review, Vol. 34

高橋　準　1993　『新中間層の再生産戦略：一九一〇年代・二〇年代日本におけるその「自己との関係」』『社会学評論』43巻４号

橋本健二・友枝敏雄　1986　「日本社会における地位非一貫性の趨勢1955－1975とその意味」『社会学評論』37巻２号

秦政春　1984　「家庭環境と学業成績」『福岡教育大学紀要』34号

藤田英典　1978　「社会的地位形成過程における教育の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会

藤田英典　1979　「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣

藤田英典　1991　『子ども・学校・社会』東京大学出版会

Bourdiew, P.　1979（石井洋二郎訳　1990）　『ディスタンクシオン』（Ⅰ，Ⅱ）藤原書店

Meyer, J.W.　1970　"The Charter: Conditions of diffuse socialization in schools" in W.R. Scott, ed., Holt, Rinehart & Winston

宮島喬・藤田英典編　1991　『文化と社会：差異化・構造化・再生産』有信堂

郭凡　1993　「中国的社会分化研究」李江涛ほか編『中国社会分層－改革中的巨変』商務印書館

郭康健・劉錫霖　1997　「市場経済対家庭価値的衝撃－上海的個案研究」郭・劉編『蛻変中的中国家庭』廣角鏡出版社有限公司

李銀河著（村田雄二郎・村田久美子訳）　1992　「現代中国社会の準身分制について」『中国研究月報』46巻９号

陸学芸ほか　1997　『社会結構的変遷』中国社会科学出版社

若林敬子　1996　「中国社会と家族変動」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編者『いま家族に何が起こっているのか』家族社会学研究シリーズⅠ

朱慶芳　1998　「1997－1998年：中国人民生活状況的分析与預測」汝　信ほか編『1998年：中国社会形勢分析与預測』社会科学文献出版社

袁岳・范文　1998　「1997－1998年：中国城市社会熱点問題調査」汝　信ほか編（1998）・前掲書